

住み慣れたホームを飛び出し、異郷に生きる人々と生活をともにしながら、彼らの考え方や行動様式を学び、その成果を書(民族誌)に記す——この営みは、文化人類学と呼ばれる、人類文化の普遍性と多様性を探求する学問の核にあるものだ。フィールドワークを行い、民族誌を書くことは大変根気のいる営みなのだが、それを嬉々として支えているものが「萌え」である。では、人類学者はどこで何に萌えているのか。

本書は、東京外国語大学で文化人類学を学んだかつての学生や研究員たちが中心となって、自らの萌えの経験をつづったエッセイ集である。読者には、執筆者たちが描き出す萌えの光景から、人類学を駆動する萌えの確かな「力」を感じ取ってほしい。

本書がカバーする範囲は、カナダ、キューバ、ツバル、オーストラリア、パプアニューギニア、インドネシア、日本、ラオス、タイ、インド、ケニア、ガーナ、コートディヴォワールなど、世界各地におよぶ。萌えの対象(「テーマ」)も、先住民の文化復興、芸能(パフォーミングアート)、名前、島、歌姫の声音、日本食、布(機織り)、人類

学的知性など、多岐にわたる。なかには、はじめてフィールドを訪れたときの忘れがたい「出会い」や先人たちの「教え」(「萌える言葉」)を取り上げたエッセイもある。地域もテーマもさまざまな一二本のエッセイは、三つのパートに分類されている。第一部はフィールドの人々の萌えと執筆者の萌えの共鳴を主題にするエッセイ群、第二部は人類学者の一方的な萌えやその内省を主題とするエッセイ群である。それに対して、第三部は一人の人類学者のエッセイやインタヴュー、日常的発言を検討することとで、「萌える人類学者」像を具体的に提示しようという試みである。もちろん、興味関心のある地域やテーマから読み進めてもらってかまわない。

本書は、文化人類学の魅力を伝える一般書であると同時に、文化人類学を学びはじめた学部生向けの準教科書でもある。萌えているため、どのエッセイもマニア度は高いが、比較的平易な文体で書かれている。また系統的ではないものの、この学問の営みや基本的な考え方・用語を学ぶことができる内容になっている。とくに序章では、

続く各論(エッセイ)の導入として、萌えと関連づけながら、人類学の営み全体を総括している。読者が、本書で取り上げた地域やテーマ、そして人類学という学問をより身近に感じ、ともに萌えていこうと思うきっかけになれば望外の喜びである。

ばば・じゅん

和光大学表現学部教授
文化人類学

「萌え」こそが 人類学を駆動する

馬場 淳



萌える人類学者

馬場 淳 平田晶子
森 昭子 小西公大【編】

2021 年 3 月刊